

【実践報告5】新城市立八名中学校

1 はじめに

本校では、研究を進めるに当たり、総合教育センターから示されているカリキュラム・マネジメントシートを活用することで、生徒の実態や教育的環境を明らかにし、その結果を基に、教育目標の実現に向け、生徒に身

【資料1 職員で話し合ったSWOT分析】

(支援的要因) 保護者 ・教育活動に協力的であり、学校のことを理解している。 ・生徒に手をかける保護者が多く、子どもの思いに寄り添って支援してくれている。 地域 ・田舎で落ち着いた環境で、歴史・文化・産業・自然等、教育資源等が豊富である。	+	+	(強み)
	生徒 ・指示を受け、確実にこなそうと努力する。 ・授業に真剣に取り組むことができる。 ・協力的であり、素直に行動する。 職員 ・職員全員で生徒一人一人の情報を共有できる。 ・学年の枠を超えて、生徒指導等に当たることができる。		
外 保護者 ・過保護すぎる面があり、生徒自身でもできることを保護者が行ってしまふ。 ・我が子中心で広い視野でみられず、小学校時の子供同士のトラブルを引きずってしまう。 地域 ・つながり、結び付きが強く、地域と学校で取組を始めると抜け出せないことがある。	-	-	(弱み)
(阻害的要因)			
		生徒 ・受け身的である。 ・少人数のため、話し合いが深まらない時がある。 ・小学校から同じ仲間と生活しており、人間関係が固定され、新たな挑戦等、しづらい雰囲気がある。 職員 ・人手不足で校務分掌の負担が大きく、十分に生徒に対応できなかったり、行事の運営に苦労したりする。	内

に付けさせたい資質・能力を検討した。資料1は、職員で取り組んだSWOT分析の結果である。この分析から八名中学校の強みは、素直で真面目な生徒が多い点である。生徒は三世代で暮らす家族が多く、落ち着いて授業や行事に取り組むことができる。また、校区は歴史的・文化的な資源が豊富であることも強みとして挙げられる。弱みとしては、受け身な生徒が多いことである。指示されたことは地道に取り組むが、自分で考えて行動できなかつたり、自己主張が弱く、人任せにしたりする姿がよく見られた。このような分析を通して、目指す生徒像を次のように設定し、育成すべき資質・能力を「本気」「創出」の姿と捉え、研究に取り組むことにした。

- ・どんな課題でも自分事として捉え、自ら考え、行動する生徒 (本気の姿)
- ・仲間との関わり合いを通して、自分の考えを練り上げ、新たな行動、新たな自分自身を創り出す生徒 (創出の姿)

2 実践

(1) グランドデザインの策定・周知と教育目標の共有

本校では、保護者・地域と目標を共有して、生徒を育成していくことが教育目標の実現への近道と考えた。そこで、保護者・地域・職員で八名中生を語る会(資料2)を行い、生徒の現状について話し合う場を設けた。この会では、生徒たちに「自分自身をマネジメントする力」を身に付けてほしいというまとめとなり、本校が目指す「自ら考え、行動する生徒」「自分の考えを練り上げ、新たな行動、新たな自分自身を創り出す生徒」と共通していた。

このような活動を基に、八名中学校では教育目標の実現のために、資料3のようなグランドデザインを作成し、「本気」「創出」の姿をキーワードとして全ての教育活動の指針とした。

完成したグランドデザインは、PTA総会等で説明したり、学校新聞、校長室だより「やなかぜ通信」で

【資料2 Zoomにて「八名中生を語る会」開催】



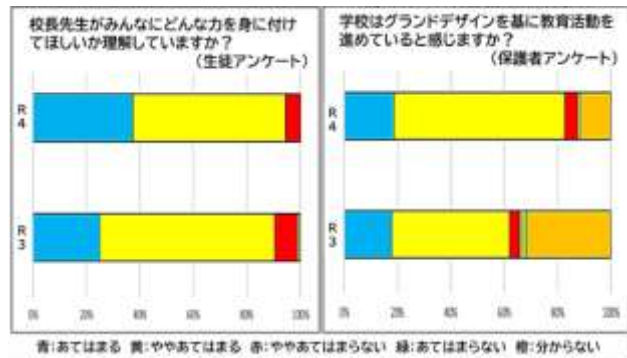
【資料3 グランドデザイン簡略版(地域・保護者・生徒用)】



伝えたりした。生徒に向けては、全校集会でグランドデザインに込められた思いを説明した。また、教室掲示やウェブページ等への掲載も有り、目標とする生徒像を共有していった。

資料4は、教育方針の理解についてのアンケートの結果である。令和3年度と4年度の結果を比較すると、生徒の校長の考えを理解している割合、保護者のグランドデザインの周知の割合が高くなっていることが分かる。

【資料4 生徒・保護者アンケート結果】



(2) 目標に基づくカリキュラム・マネジメント

本校では「本気」を、対峙する課題に惹かれ、夢中になり、課題解決に向けて熱中する姿、「創出」を、本気の取組での感動の積み重ねから得られる新たな考え、新たな活動、新たな自分を創り出す姿と設定した。まず、各教科・領域における生徒の「本気」「創出」の姿を具体的に表した。

資料5

【資料5 各教科・領域の「本気」「創出」の姿】

は、各教科・領域の「本気」「創出」の姿の一部である。職員間で「本気」「創出」の姿に関

	本 気	創 出
国語	物語文や説明的文章等のさまざまな教材に触れながら、言語活動を通して、豊かな言葉をもとに自分の考えを広げたり深めたりする姿	言葉がもつ価値を認識し、考える力や感じたり想像したりする力を養い、仲間との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げる姿
社会	社会的な見方・考え方を働かせ、課題に対して深く追究することを通して、知識や技能を身に付けながら分析し、自分の考えをまとめようとする姿	よりよい社会の実現を視野に、社会的事象の仕組みや働きを多面的多角的に考察したり、課題を主体的に解決したりすることを通して、社会生活に生かす姿
総合	ふるさと「八名」の三宝(人、自然、文化)について地域に出て、見て、聞いて、体験して、意欲的に追究したり、自分の生き方について積極的に調べたりする姿	ふるさとの「八名」の三宝(人、自然、文化)と関わりながら、学習活動を通して課題を解決したり、地域に働きかけたりすることで、ふるさとへの思いを強め、自分の生き方について考えを深める姿

員間で「本気」「創出」の姿に関して共通理解を図ることで、各教科・領域の目標の達成とともに、教育目標の実現に向けた授業、行事づくりに力を入れた。

研究を進めていくと、「本気」の姿がなければ「創出」の姿にはつながらないということが分かってきた。「本気」の姿が表出する場面を意図的に授業に位置付け、さまざまな手だてをうっていくことで、「身に付けた知識・技能を利用し、新たな課題、新たな考えを生み出す姿」である「創出」の姿が表出すると考えた。

ここでは、3年社会科「第二次世界大戦」の授業を基に、本校の教科での取組を紹介する。指導案の本時の学習には、授業者が目指す「本気」「創出」の姿を記し、授業者、参観者がそのことを意識して授業に臨めるようにした(資料6)。今回の授業では「日本はなぜ戦争を止めることができなかったのだろう」という追究課題を軸に個別学習を進め、本時で意見交流を行った。生徒たちは個別追

【資料6 本校の指導案本時】

5分 ◆日本は戦争に向かうのを止めることはできたのだろうか。◇自分の考えをタブレット端末でまとめ、発表する。

止められた <政府> ・国際連盟を脱退せず、国際的に協力していけば世界から孤立しなかった。 ・中国と早々に講和条約を結べばよかった。 <国民> ・米騒動等のように、全国民が一致団結していけば。

止められなかった <政府> ・石油が禁止され、欧米各国の圧力がかかって、資源獲得に向かうしかなかった。 ・第一次世界大戦等、戦争で地位が上がったために、希望を捨てることができなかった。 <国民> ・言論統制がかかり、国民も支持していた。 ・戦争に勝てば楽な生活ができるという思いが強かった。

20分 ◆戦争を止められるとしたらいつ、どうすれば止めることができたのだろうか。◇戦争が起こるまでの流れを年表で再確認してグループで戦争を止めるタイミング、政策を考えて発表する。

1929: 世界恐慌
1933: 国際連盟脱退
1939: 満州事変
1945: 太平洋戦争

・世界恐慌で、世界が自国を優先させなければ、国際連盟を脱退するべきではなかった。
・太平洋戦争で早々に講和を結べば。

45分 ◇本時の課題に対する自分の振り返りをオクリンクに書く。 ・どうすることもできなかったかもしれないけれど、どこかで立ち止まる瞬間はあったと思う。

し出す。
※どちらの立場なのかはっきりさせ、意見が言えるように、オクリンクで仲間の考えを共有する。
○考えが整理できない生徒のために、自分が考えや仲間がまとめたスライドで既習事項を確認するように助言する。

★本気Ⅱ 戦争が止められるかどうか、今までの学習を根拠にし自分の考えをもって話し合いに臨み、考えを盛り上げる姿

※話し合いを活発にするために、グループで考えを発表した後、「どの意見が、一番実現性が高いのか」と補助発問を入れる。

★本気Ⅲ 自分の考えや仲間の考えを参考にしながら、積極的に戦争を止めるための対策について議論し、視野を広げる姿

究を通して、「国際関係」「経済的側面」「軍部の台頭」等の面から日本が第二次世界大戦に参戦したと考え、戦争に向かうのを「止められなかった」「止められた」という立場に分かれて話し合いを行った。「止められなかった」派は「資源獲得のために動くしかない」「アメリカとの関係が悪化し、戦争するしか方法はなかった」等の意見を出した。それに対して「止められた」派は「国際連盟から脱退しなければ世界から孤立しなかった」「満州国を取りにいかずに、中国と和解していればよかった」等と考え、個別学習を根拠に日本の世界大戦への参戦について、さまざまな角度から本気の話し合いが行われた。教師の追発問「もし戦争を止められたとしたら、いつ？」に対して、生徒たちは年表を広げ、「やはり満州事変のときか…」「世界恐慌時にもう少し対策を講じていけば…」等、仲間と話し合い、考えを練り上げていく創出の姿が見られた。

単元の終末には、生徒から「八名地域は戦時中どんな様子だったのか」という疑問が上がった。そこで、学習のまとめとして地域講師から八名地域の当時の話を聞く時間を設定した。

生徒たちは、徴兵された若者が家族や地域の人々に見送られている写真や、戦地に赴き命を落とした話、残された家族の話等を聞いた。全ての出来事が住んでいる地域で実際に起こったことだと知り、改めて戦争の悲惨さを感じ取るとともに、決して戦争は起こさないと気持を高めた。

資料8は、本気・創出に関わるアンケートの結果である。「八名中生が『本気』で取り組めるようになった」と、生徒・保護者ともに回答した割合が高まった。また、「学習を生活に生かす」「進んで考え、自ら実行する力が身に付いている」という「創出」の部分も肯定的な捉えが多くなってきた。

(3) 地域と目標を共有し、連携・協働した実践

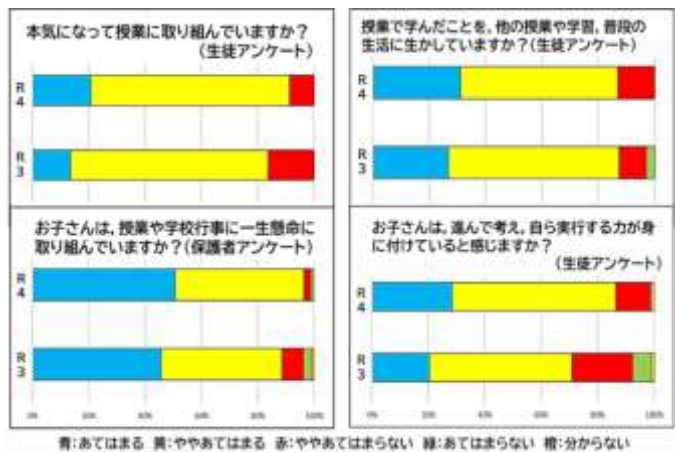
行事の見直しが問われる昨今では、さまざまな活動において育成すべき資質・能力を意識した取組が必要不可欠となる。「SUNフラワー活動」は、20年以上前から学年の垣根を越えて協力して花を育てることで、心を成長させ、地域に花を広げることを目的として実施されてきた。しかし、年々目的意識が低下し、生徒の「本気」「創出」の姿とは程遠いものとなっていた。生徒会執行部にその現状を伝えると、保護者や地域の方と鉢花をつくり、独り暮らしのお年寄りに贈り、八名中の花を地域に広げたいという意見が出された。花の苗は地元の新城有教館高校に依頼し、当日は園芸専攻の職員、生徒が鉢植えのコツを説明・指導していただき、生徒は班の仲間、保護者、地域の方と協力して、寄せ植えを完成させた。その後、縦割り班で花を育て、夏休み前に民生委員の協力を得て、独り暮らしのお年寄りにフラワーギフトとしてプレゼントした。

今回、新たな取組として独り暮らしのお年寄りに手渡した。生徒は受け取る相手を意識して花を本気で育てることができ、資質・能力の育成につながった。花を手渡ししたときのお年寄りの笑顔は、

【資料7 戦争を止められた時期について話し合う生徒】



【資料8 生徒・保護者アンケート結果】



【資料9 SUNフラワー活動】



人と人との絆や地域との結び付きを創出し、つながりを大切にしたいという思いを強めた。

次に、2年生総合的な学習の時間「新城市 企業PR動画」の実践である。職場体験学習の中止を受け、その代替案を検討し、新城青年会議所と県三河の山里サポートデスクの活動と協働し、新城市企業PR動画制作に携わることが決定した。青年会議所と山里サポートデスクには、地元でがんばっている企業のことや、ふるさとのよさを中学生に知ってほしいという目的、学校には、生徒が社会人と関わることでルールやマナーを学び、職業についての理解を深めてほしいという思いがあった。

PR動画制作は、生徒が紹介したい内容を考え、動画を撮影(資料10)し、編集する流れで学習を進め、終末には生徒たちがつくったPR動画を動画共有サイトに掲載した。生徒たちは地元企業8社を取材し、経営者と話したり仕事の様子を見学したりすることで、その企業の強みを本気になって探っていった。生徒たちが社会人と直接触れ合い、話を聞くことは、仕事に対する思いの強さを直接感じ、働くことの意義を理解するよいきっかけになった。また、経営者と協力して、時間をかけて地域愛にあふれた動画を創出した経験は、学校では得難い達成感をもたらし、動画共有サイトで配信することが地元への貢献となっていることに喜びを感じた。

【資料10 動画を撮影する生徒】

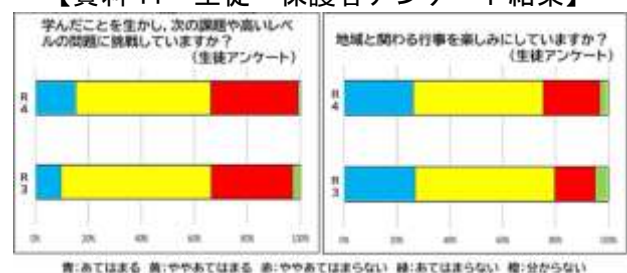


3 実践の成果と課題

令和3年度の生徒会執行部の公約は「校則の見直し」であった。執行部は計画を練り上げ、全校への服装意識調査や職員との話し合い、職員会議での提案、全校集会を経て、授業中、登下校時において、体操服と制服のいずれかを選べる服装選択制を実現させた。このような主体的な活動は生徒会執行部における「本気」の取組、考えを形にする「創出」の姿だと捉えられる。

課題としては、資料11にある生徒の「次の課題や高いレベルの問題へ挑戦する気持ち」には、変化がほとんど見られなかったことである。これは、新たな課題追究心を高める教師側の追発問や、更なる知的好奇心を刺激する課題提示等が不十分であったと考えられる。今後は新たな「創出」につなげるために、手だての研究を進め、教育活動の改善に努めていきたい。また、地域と関わる学習を進めてきたが、その活動を「楽しみに思っている」と回答した生徒の割合が低いことが明らかとなった。地域との関わり合いが生徒自ら望んだものではなかった面があったのだろう。価値付けを生徒自身が行うことができるように、生徒の思いを尊重した活動に改善していく必要性を感じた。

【資料11 生徒・保護者アンケート結果】



4 おわりに

本研究を進め、「ランドデザインの策定と周知」「カリキュラム・マネジメントの視点」「社会との協働」の三つを計画し、バランスよく取り組んでいくことの難しさを感じた。まず、学校教育目標の周知を進め、見通しをもって次の実践をしていくことが大切であろう。最大の壁は、時間。目標を共有すること、計画すること等、情報を共有し効率よく進めていくことが鍵となる。新しいものを取り入れるのではなく、視点を変えて今あるものを少しずつモデルチェンジしていくことが重要である。

今回の研究での成果・課題を生かし、今後も日々の変化に対応しながら、教育目標の実現を目指し、地域と協働し、組織を挙げて実りある実践を少しずつ積み重ねていきたいと考える。